

日本人大学生の教授言語に対する好みと期待 — 外国語としての英語の授業における L1 使用に対する態度 — ¹⁾

岩 中 貴 裕 (大学教育開発センター准教授)

ウィリー イアン (大学教育開発センター准教授)

岩 井 千 秋 (広島市立大学教授)

高 垣 俊 之 (尾道市立大学教授)

小 西 廣 司 (松山大学教授)

カワモト ジュリア (松山大学講師)

カーソン エレノア (広島市立大学非常勤講師)

1. はじめに

外国語の授業において使用される言語は教授言語 (Medium of Instruction : MOI) と呼ばれる。日本では日本人教師による英語の授業においては、学習者の母語 (以下、L1) である日本語が MOI として主に使用されてきた。その状況が現在、大きく変わりつつある。

新しい学習指導要領の施行に伴い、平成 25 年度から高等学校では英語の授業を英語で教えることが基本となった。つまり目標言語である英語を MOI として使用することが基本となった。この方針転換は、やがて大学における英語教育にも大きな影響を与えることであろう。平成 28 年度からは新しい学習指導要領で学んだ高等学校卒業生が新入生として大学に入学してくる。MOI に対する好みや態度が旧学習指導要領で英語を学んだ学生とは異なっていると考えられる。

高等学校の学習指導要領の改訂に伴い、大学英語教育も何らかの策を講じていく必要がある。そのためには様々な調査が求められるが、まずは旧学習指導要領で英語を学習した学生と新学習指導要領で英語を学習した学習者間で、MOI に対する好みや期待が異なっているのかどうかの実態を明らかにしていくことが重要であろう。

教師の授業における英語使用は、学習者にどのような影響を与えるのであろうか。教師が英語を積極的に使わなければ学習者が英語を話すようになるわけがないという主張は至極当然であろう。教師の授業における MOI としての英語使用が学習者に与える影響を明らかにすることを試みた研究もいくつか散見される。Koga and Sato (2013) と Sato and Koga (2012) は、主に英語で授業を行ったクラスでは半年後に受講していた大学生の「会話意欲 (Willing to Communicate: WTC)」、すなわち英語で自発的にコミュニケーションしようとする意志が有意に向上したが、主に日本語で授業を行い、学生には英語の使用を強く奨励したクラスでは WTC の向上がもたらされなかったという研究結果を報告している。この結果は、教師自身が英語使用者のモデルとなることの重要性を示唆していると言えるのではないだろうか。学習者に英語使用を奨励し、自らがその見本を示すことが教師には求められてい

ると考えていいただろう。

しかし、「英語の授業は基本的に英語で」という方針への転換そのものは誤っていないとしても、それがすべての学習者に効果的であり英語教育改善のための特效薬になると考えるのは拙速であろう。そもそも「基本的に」と学習指導要領に明記されているように、日本語の使用が完全に排除されているわけではない。実際、研究者の中には、L1 への翻訳は言語教育・学習の自然かつ効果的な手段であり、異文化理解・言語意識・個性の維持を推進すると主張する者もいる（例えば Cook、2010）。また近年の応用言語学の研究は、用途に応じて L1 を目標言語と併用することによって、学習者の心理的負担を軽減できる（Macaro & Lee、2012）、学習動機が高められる（Burden、2004）、より高い学習効果が得られる（Soullignavong、2009）、授業の理解や学習の効率を高められる（Kim & Petraki、2009）などの望ましい効果が得られることを指摘している。英米で一般的な、英語が第二言語として教えられる環境（English as a Second Language : ESL）とは異なり、日本はほぼすべての学習者が L1 を共有しているという環境である。授業において L1 を使用することが学習者の理解や学びを促進する可能性は高いと考えられる。以上のような先行研究はあるが、日本人英語学習者、とりわけ、大学生英語学習者が、英語授業において、MOI としての L1 使用と英語使用に関してどのように感じているのか、また、大学の英語授業担当教員はどう感じているのかを、学校種や専門分野の異なる複数の学校を対象に広範囲に及ぶ学習者を調査参加者とした研究は見当たらない。

こうしたことから、筆者らは MOI の選択が学習者の情意面及び学習成果に与える影響について関心を寄せ、新しい学習指導要領の施行に伴い、研究プロジェクトを実施するための準備を開始した。そして平成 26 年度より調査を開始した。この調査研究は科学研究費の補助を受けて実施されている。表 1 に研究の概要を示す。

表 1 研究概要

研究課題	「英語を英語で」教える高等学校新指導要領が大学英語教育に与える影響	
種目	基盤研究 B	
研究代表者	岩井千秋（広島市立大学）	
研究分担者	岩中貴裕（香川大学） 高垣俊之（尾道市立大学） 小西廣司（松山大学）	ウィリー イアン（香川大学） カワモト ジュリア（松山大学）
研究協力者	カーソン エレノア（広島市立大学非常勤講師）	
研究期間	平成 26 - 30 年度（平成 30 年度は総括）	

本調査研究は、大学生英語学習者、及び大学の英語授業担当教員を対象に、平成 26～29 年度²⁾ の 4 年間に亘り経年調査を行う。その上で、旧学習指導要領で英語を学んだ学習者グループ X（H26・27 年度入学生）と新学習指導要領で英語を学んだ学習者グループ Y（H28・29 年度入学生）を比較することを主目的とする。具体的には大学英語学習者を通じて、授業での教師による MOI 使用実態やそれに対する学習者の意識を調査し、以下の研究課題に取り組むことである。

- 1) 高校で「英語で英語を」教えられた度合いが、実態として、グループ X と Y の間で異なるか。
- 2) 大学入学後の英語クラスで、教師が使用する MOI に対して、学習者の好みや期待、授業の理解度、学習効果の評価などが X と Y のグループで異なるか。もし異なるとすればどのように異なるか。

- 3) 新旧の学習指導要領で指導された学習者の MOI に対する好みや期待、授業理解度、学習効果の自己評価などは1年間の大学での授業履修期間中にどのように変化するか。
- 4) 大学の英語授業担当者は MOI を実際の授業でどのように使っているか。また MOI に対してどのような意識をもっているか。
- 5) 1)～4) は学習者の英語熟達度、専門分野(学部)、英語学習の好き嫌い、高校での学習方法等の学習者の内的要因、及び学習活動内容、英語科目の目標、英語母語話者 vs. 非母語話者教員、などの外的要因にどの程度影響されるか。

研究計画の概要は以上の通りであるが、以下では初年度(平成26年度)に行った調査についてのみ報告する。平成26年度は、5月から7月にかけて大学1年次生を対象としたアンケート調査³⁾を行った。本稿はそのデータ収集方法と結果を報告することをその目的とする。

2. 平成26年度の調査

大学1年次生に対して、1) MOI に対してどのような好みや期待を持っているのか、2) MOI に対する態度は授業履修期間中にどのように変化するのか、3) 調査参加者の英語力は MOI に対する態度に影響を与えるのか、を明らかにするための調査を実施した。

2-1. 調査参加者

調査参加者は西日本の四年制大学に在学する1年次生である。調査は4つの大学で2回実施した。調査参加者の英語力が特定のレベルに偏ることがないように、4つの大学は、国立大学(1校)、公立大学(2校)、私立大学(1校)とし、調査参加者が学校種によって著しく偏らないようにした。収集したアンケートの中にはすべての項目に対して同じ回答を選んでいるもの(例:すべての質問項目に対して選択肢の5を選んでいる)があった。検討の結果、それらは分析対象のデータから除外し、2回のアンケート両方に回答した者のみを分析対象者とした。その結果、最終的に調査参加者数は表2に示すように1149名になった。

表2 調査参加者の専門

人文	自然科学	経済・経営	芸術	合計
341	448	239	61	1149

2-2. アンケート

上述のとおり、アンケート調査を2回実施したが、その時期は5月(以下、第一時点)と7月(以下、第二時点)である。授業開始時点と授業終了時点で同じアンケートを実施することによって、調査参加者の MOI に対する好みや期待が学期を通じて継続的にどのように変化するのかを明らかにするためである。

本調査では Student Preferences for Instructional Language (以下、SPIL) と呼ばれるアンケート調

査紙を使用した。SPIL は筆者の一人であるカーソンによって開発されたアンケート調査紙である (Carson, 2014)。開発者であるカーソンの許可を得た上で、本稿で紹介している。SPIL の英語版については Carson (in press) で紹介されている。SPIL は学生の現在の英語力や中学校入学以前の英語学習経験の有無などについて確認する前半部分と、MOI に対する好みや期待を調査する後半部分から成り立っている。前半部分は第一時点と第二時点で異なっている部分があるが、後半部分は同一である。この後半部分の質問項目は試験使用を経た後、統計処理 (因子分析) を行って決定され、日本人英語学習者の MOI に対する好みや期待を 5 件法のリッカート尺度を用いて測定するもので、信頼性も確保されている。SPIL は合計 40 問で構成される (補遺を参照) が、これらは表 3 に示す 7 つの因子項目に分類される。

表 3 SPIL を構成する 7 つの因子⁴⁾

因子	因子名	質問項目
F 1	Control of students' emotions (学習者の感情を制御)	31, 32, 33, 34, 35
F 2	Language instruction (言語に関わる授業での指導)	7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16
F 3	Teachers' ability of using Japanese (教師の日本語使用能力)	1, 2, 3, 4, 5, 6
F 4	Checking students' understanding about class (学習者の授業理解度を確認)	23, 28, 29, 30
F 5	Review of previous lessons (前回の授業を復習)	17, 18, 19, 20, 21, 22
F 6	Comprehension of teachers' instruction (教師の指示を理解)	24, 25, 26, 27
F 7	Culture and society (文化と社会)	36, 37, 38, 39, 40

3. 結果⁵⁾

3-1. SPIL 前半部分

学生は英語の授業で教師にどの程度 MOI として日本語を使用して欲しいと思っているのであろうか。また、MOI として英語を使用することに対してどのように感じているのであろうか。まず、調査参加者が第二時点で回答した 3 つの質問項目を紹介し、その回答結果を報告する。

1. あなたは英語の先生に授業中にどの程度、日本語を使って説明してもらいたいと思いますか。およその割合を以下から選んでください。
 (A) 0% (B) 20% (C) 40% (D) 60% (E) 80% (F) 100%

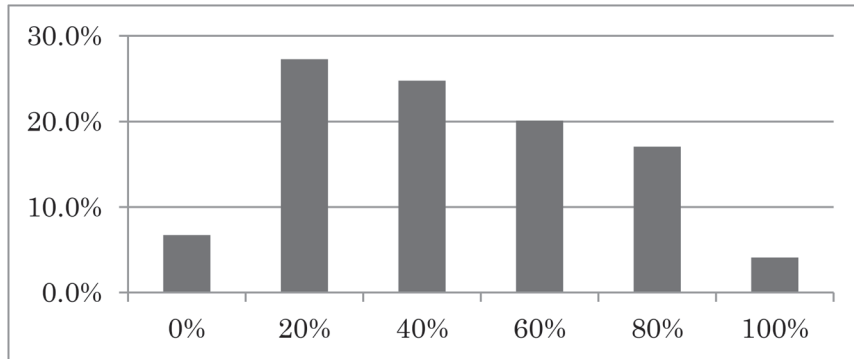


図1 日本語使用の割合に対する要望

日本語での説明はまったく必要ないと答えた調査参加者の割合は6.7%であった。多くの調査参加者が、部分的に日本語による説明を求めているという結果になった。授業をすべて日本語で行うことを望んだ調査参加者の割合は4.1%であった。

2. あなたはすべてのことが⁶⁾英語で行われる英語の授業についてどう思いますか。
 (A) とても望ましい (B) 望ましい (C) どちらともいえない
 (D) いや (E) 絶対いや

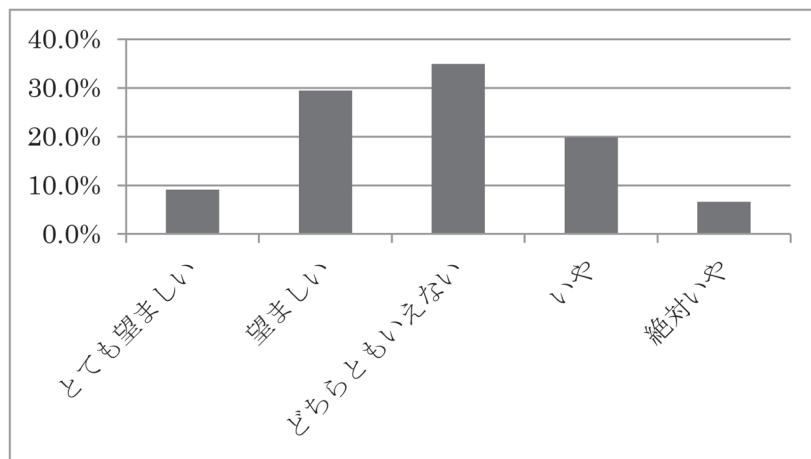


図2 英語をMOIとして使用することに対する反応

「とても望ましい」と「望ましい」の合計が38.6%となった。一方、「いや」と「絶対いや」の合計は26.5%となった。「どちらともいえない」を選んだ調査参加者の割合は34.9%であった。すべてが英語で行われる英語の授業に対して、肯定的に捉えている調査参加者の割合が否定的に捉えている調査参加者の割合を上回るという結果が得られた。

3. 主に英語だけで教えらるる英語の授業は、あなたの学習意欲を高めると思いますか。

- (A) とてもそう思う (B) そう思う (C) どちらともいえない
(D) そう思わない (E) まったくそう思わない

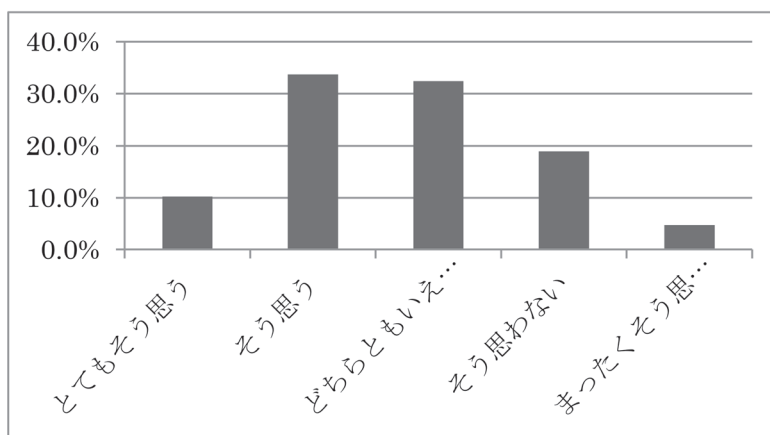


図3 英語を MOI として使用することが学習意欲に与える影響

「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が 43.9%となった。「そう思わない」と「まったくそう思わない」の合計は 23.7%であった。この結果は、MOI を目標言語の英語とすることが学習意欲の向上に貢献すると考えていることを示しており、望ましい学習成果をもたらす可能性が高い。

3-2. SPIL 後半部分

(1) 第一時点と第二時点の比較

SPIL の後半部分を構成する 40 の質問項目は第一時点と第二時点で共通である。同じアンケートを 2 回実施することによって、受講期間中に MOI に対する好みや期待がどのように変化するかを明らかにすることを試みた。対応のある t テストによって第一時点と第二時点の平均値の差を検討した。その結果を表 4 に示す。

表 4 第一時点と第二時点の比較

因子	因子名	第一時点		第二時点		対応のある t テスト		
		M	SD	M	SD	t	p	r
F1**	Control of students' emotions	3.385	0.684	3.541	0.685	9.033	.000	.26
F2	Language instruction	3.631	0.751	3.643	0.765	.616	.538	.02
F3*	Teachers' ability of using Japanese	3.242	0.782	3.289	0.784	2.198	.028	.07
F4	Checking students' understanding about class	3.766	0.842	3.751	0.830	.611	.541	.02
F5	Review of previous lessons	3.899	0.834	3.937	0.854	1.648	.100	.05
F6	Comprehension of teachers' instruction	2.895	0.913	2.935	0.893	1.568	.117	.05
F7	Culture and society	3.032	0.885	3.020	0.869	.476	.634	.02

$N = 1149$, ** $p < .01$, * $p < .05$

第一因子と第三因子で統計的有意差があることが確認できた。第一因子は1%水準で、第三因子は5%水準で有意差があった。第一因子も第三因子も、第二時点で平均値が高くなっている。つまりこの2つの領域では日本語の使用を求める傾向が有意に高まったということを示している。

第三因子は教師の日本語能力に関わっている。今回の調査結果から解釈すれば受講開始時よりも受講終了時に、教師に対して日本語能力を求めるようになったということである。

第一因子は学生の感情に関わっている。学生をリラックスさせようとする時、緊張感を和らげようとする時、自信を持たせようとする時に日本語を求める程度が第二時点で高まったということを示している。しかし図4を見れば明らかなように数値の変化はごくわずかである。第一因子は1%水準で有意差有りという結果になっているが、効果量は小程度である ($r = .26$)。

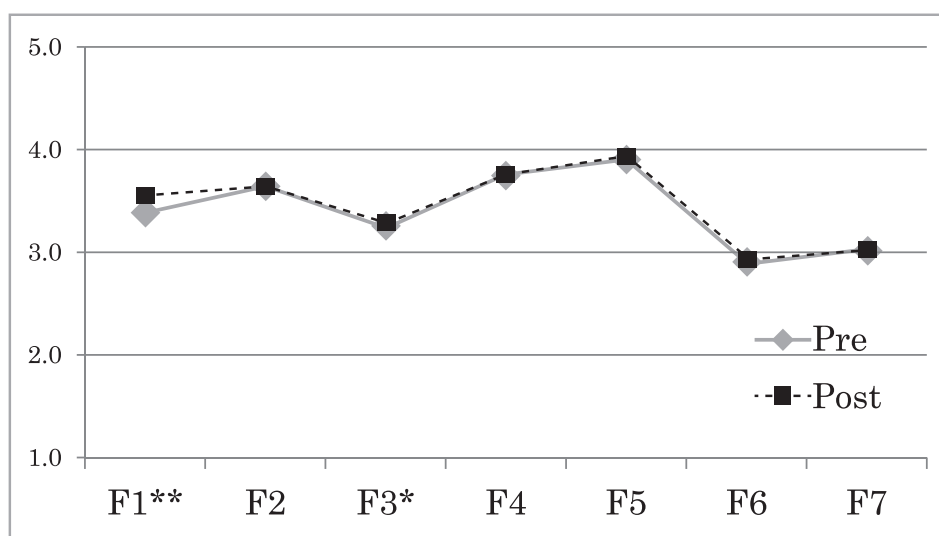


図4 第一時点と第二時点の比較

(2) 調査参加者の英語力と MOI に対する態度

MOI に対する好みや態度に影響を与える要因のひとつとして調査参加者の英語力が考えられる。本調査研究では第一時点で調査参加者に各自の英語力を自己申告させた。自分の現時点での英語力を以下の選択肢から選ぶように指示した。調査参加者の選択をサポートするためのガイドラインとして、英語を用いて何ができるのかを具体的に示した。

- (1) 英検 4 級 (TOEIC 300 未満) レベルかそれより低い
- (2) 英検 3 級 (TOEIC 300-399) レベル
- (3) 英検準 2 級 (TOEIC 400-539) レベル
- (4) 英検 2 級 (TOEIC 540-739) レベル
- (5) 英検準 1 級 (TOEIC 740 以上) レベルかそれ以上

表5 英語力を示すガイドライン

レベル	英語を用いて出来ること
(1) 英検4級レベル	初歩的な語句や簡単な定型表現であれば使うことができる。
(2) 英検3級レベル	たどたどしいが、簡単な自己紹介や身近なことが話せる。
(3) 英検準2級レベル	少したどたどしいが、日常生活で簡単な用を足したり、興味・関心のあることについて自分の考えが言える。
(4) 英検2級レベル	日常生活での出来事について、あまり言いよどむことなく説明したり、用件を伝えたりすることができる。
(5) 英検準1級レベル	社会性の高い話題について、説明したり、自分の意見を述べたりすることができる。

(5) を選択した調査参加者は1149名のうちのわずか3名であった。この点を考慮して分析の際は、(4)と(5)をひとつのグループとして処理した。調査参加者の英語力を表6に示す。表中の(4)は、上記の選択肢の(4)と(5)を合計した数字である。

表6 調査参加者の英語力

選択肢	(1)	(2)	(3)	(4)	回答なし	合計
人数	251	401	361	119	17	1149

調査参加者の英語力はMOIに対する態度にどのように影響を与えるのであろうか。表7と図5にその結果を示す。

表7 英語力とMOIに対する態度

		(1)	(2)	(3)	(4)	平均値
平均値	F1	3.697	3.594	3.518	3.053	3.536
	F2	3.836	3.737	3.544	3.146	3.636
	F3	3.554	3.371	3.166	2.753	3.281
	F4	4.008	3.831	3.652	3.193	3.746
	F5	4.060	4.031	3.882	3.455	3.930
	F6	3.194	3.016	2.819	2.413	2.929
	F7	3.262	3.100	2.928	2.466	3.014
標準偏差	F1	0.6325	0.6550	0.6492	0.8007	0.6857
	F2	0.7084	0.7172	0.7029	0.9324	0.7624
	F3	0.7397	0.7425	0.7098	0.8799	0.7810
	F4	0.7419	0.7804	0.7849	0.9881	0.8293
	F5	0.8126	0.7956	0.8131	1.0609	0.8542
	F6	0.9022	0.8613	0.8446	0.8311	0.8897
	F7	0.9056	0.8225	0.8085	0.8160	0.8651

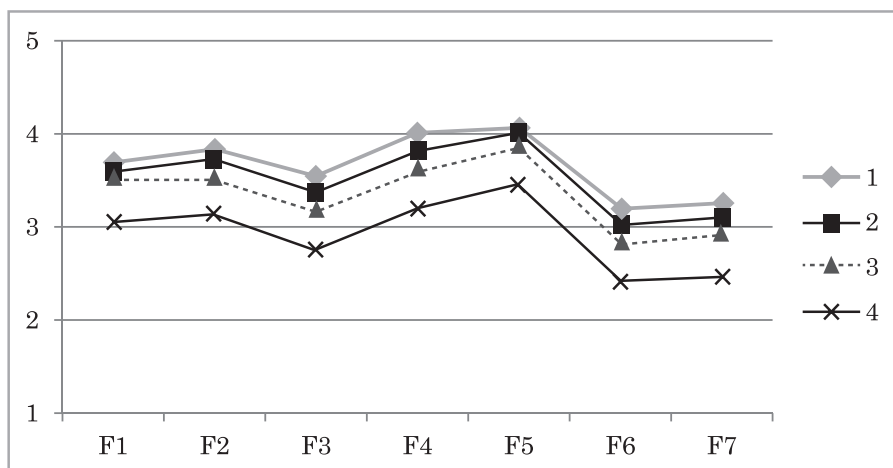


図5 英語力とMOIに対する態度

英語力の低い学生ほど数値が高くなっていることが確認できる。つまりMOIとして日本語を使用し、て欲しいと感じている。図5が示しているように英検2級以上の英語力を備えている学生は、授業内で日本語を使用して欲しいと思う程度が他のレベルの学生と比べて低くなるようである。

4. おわりに

本稿では、平成26年度の前期に4つの大学で1年次生に対して実施したアンケートの結果を報告した。調査に参加した学生すべてをひとつのグループとして捉えることによって、大学生が英語の授業を英語で行うことに対してどのように感じているのか、英語の授業においてL1をどの程度教師に使用して欲しいと思っているのか、その全体的傾向を示すことを試みた。その目的は達成することができたと考えている。

しかし1149名の調査参加者が受講した授業は様々である。調査参加者には、自分が受講している英語の授業（調査を実施した授業）が以下に挙げるどのタイプに該当するかを第一時点で選択させた。

- (1) 日本語が母語の先生で、授業はほぼすべて英語で行われている。
- (2) 日本語が母語の先生で、授業では日本語も少し交えて行われている。
- (3) 日本語が母語の先生で、授業はほとんど日本語で行われている。
- (4) 日本語が母語ではない先生で、授業はすべて英語で行われている。
- (5) 日本語が母語ではない先生で、授業は少し日本語を交えて行われている。
- (6) 日本語が母語ではない先生で、授業はほとんど日本語で行われている。

自分の受講した授業がどのタイプだったかによって、MOIに対する好みや期待は異なると考えられる。特に日本語を母語とする英語教師がMOIとして日本語を使用した場合と英語を使用した場合とで、受講生のMOIに対する好みや期待がどのように影響されるのかを明らかにする研究が必要であろう。

受講している授業のタイプが彼等の MOI に対する好みや期待にどのように影響を与えるのかについては稿を改めて報告したい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 26284080 の助成を受けたものです。

本研究を実施するにあたり、データ収集にご協力いただいた先生方、調査に協力してくださった学生に対して心よりお礼を申し上げます。また収集したデータの入力にご尽力をいただいた広島市立大学の学生に対して、感謝の意を表させていただきます。

注

- 1) 本稿は研究代表者である岩井（表 1 参照）が科学研究費申請の際に作成した申請書類をベースにして岩中が草稿を執筆した。その後、プロジェクトメンバー全員で構成、文言等に修正を加え最終原稿を完成させた。
- 2) 平成 30 年度は前年度までに実施した調査結果に基づき総括を行う。
- 3) 大学で英語を教えている教員を対象に面接調査と授業観察を実施したが、本稿はアンケート調査についてのみ言及する。
- 4) 各因子の名称は、カーソンが作成したオリジナルのものとは異なっている箇所がある。
- 5) 収集したデータの分析は、研究代表者である岩井（表 1 参照）が行った。
- 6) 質問項目にある「すべてのことが」という文言が調査参加者の回答に影響を与えていると考えられる。「主に」、「授業の大部分が」または「原則として」という文言を使用すれば異なった結果が得られたと考えられる。質問項目の文言について検討を加えた際、筆者らは、「すべてのことが」という表現を敢えてこの質問項目に含めることを決定した。授業内のすべての活動が英語のみで行われることに対して、調査参加者がどのように感じているかを把握するためである。

補遺

SPIIL の後半部分を構成する 40 の質問項目は以下の通りである。なお質問項目の日本語表現はカーソンが作成したものをベースにして一部修正が加えられている。

指示：以下の設問は大学の英語の授業についてお尋ねします。英語の先生が授業中に日本語を使うことについて、あなたはどのようなことを望みますか。以下の 5 つの基準で各問に回答してください。

1. まったく望まない
2. 望まない
3. どちらとも言えない
4. 望む
5. とても強く望む

●一般的な大学の英語のクラスで、それを担当する先生に、あなたはどの程度、以下のそれぞれについて望みますか。		回答欄
1	その先生には日本語の知識があり、日本語を理解してほしい。	
2	英語でどう質問したらよいのか分からないときや、先生の言われていることが分からないとき、先生には日本語で言ってほしい。	
3	自分にとってよい言語習得のモデルとなるので、その先生が外国人の先生の場合には、日本語を習得してほしい。	
4	私がどこで理解に苦しむかが分かるので、その先生が外国人の先生の場合には、日本語を習得してほしい。	
5	先生が授業で日本語を使ってくると英語の勉強の助けになるので、その先生には日本語を使ってほしい。	
6	英語の勉強の助けになるので、私に英語の授業で日本語を使わせてほしい。	
●現在受講している英語の授業で、あなたは、先生に日本語でどの程度説明して欲しいと思いますか。		回答欄
7	新しい単語の定義を説明するとき。	
8	似ているが使い方の異なる単語を比べるとき（例：“accident”と“incident”）。	
9	1つの単語に複数の意味がある事を説明するとき。	
10	新しいフレーズ（語句）を導入するとき。	
11	新しいスラングやくだけた表現を説明するとき。	
12	新しい文法規則を説明するとき。	
13	文法の具体例を英語から日本語へ訳すとき。	
14	文法の具体例を日本語から英語へ訳すとき。	
15	英語の単語や語句に対応する日本語の単語や語句を示すとき。	
16	英語の単語や語句が、類似した日本語の単語や語句と、どのように異なるのかを説明するとき（例：“have a cold”は日本語では「風邪を持つ」ではなく、「風邪をひく」）。	
●現在受講している英語の授業で、あなたは、先生に日本語でどの程度説明して欲しいと思いますか。		回答欄
17	英語からの外来語が、英語では異なる意味であることを示すとき。（例：日本語の「スマート」は、英語では clever（賢い）や intelligent（知的）の意味。）	
18	前のレッスンの主なポイントを復習するとき。	
19	既に学習した語彙または表現を復習するとき。	
20	複数の意味を持つ単語を復習するとき。	
21	英語からの外来語を復習するとき。	
22	スラングやくだけた表現を復習するとき。	
23	レポートまたは試験について説明するとき。	
24	英語の単語を理解できないときに、私に助け船を出してくれるとき。	
25	先生の説明を理解できないときに、私に助け船を出してくれるとき。	
26	先生に質問をしたくても、英語でどう言えば良いか分からないときに、私に助け船を出してくれるとき。	
27	質問に答えたくても、英語でどう言えば良いか分からないときに、私に助け船を出してくれるとき。	
28	重要な課題を私が理解しているかどうかチェックするとき。	
29	テストの受け方を私が理解しているかどうかチェックするとき。（例えば、ノート使用ができるかどうか。）	
30	テストの受け方や出題形式を私が理解しているかどうかチェックするとき（例えば、「選択形式」か「自由回答形式」であるか）。	
31	あなたが何かを上手にやったとき、それをあなたに伝えるとき。	
32	あなたをリラックスさせようとするとき。	
33	あなたに自信を持たせようとするとき。	

34	あなたの緊張感を和らげようとするとき。	
35	あなたが戸惑っているときに、それを軽減しようとするとき。	
36	授業中に冗談を言うとき。	
37	英語圏の文化について話すとき。	
38	英語圏の有名人について話すとき。	
39	英語圏の社会問題について話すとき。	
40	日本と英語圏の社会における文化の違いを説明するとき。	

参考文献

- Burden, P. (2004). The teacher as facilitator. *JALT Hokkaido Journal*, 8, (3-18) .
- Carson, E. (2014). Teachers and students: At L1 odds in the EFL class. In N. Sonda, & A. Krause (Eds.), *JALT2013 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.
- Carson, E. (in press). Introducing a new scale: Student preferences for instructional language (SPIL). *JACET Chugoku-Shikoku Chapter Research Bulletin*, 12.
- Cook, G. (2010). *Translation in language teaching: An argument for reassessment*. Oxford: Oxford University Press.
- Kim, Y., & Petraki, E. (2009). Students' and teachers' use of and attitudes to L1 in the EFL classroom. *The Asian EFL Journal Quarterly*, 11(4), (58-89) .
- Koga, T., & Sato, R. (2013). Effects of a debate task on changes of communication variables. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 24, (295-306) .
- Macaro, E., & Lee, J-H. (2012). Teacher language background, codeswitching, and English-only instruction: Does age make a difference to learners' attitudes? *TESOL quarterly early view*, (1-26) .
- Sato, R., & Koga, T. (2012). Examining the effects of all English class on learners' affective aspects. *Journal of the Chubu English Language Education Society*, 41, (183-190) .
- Soulignavong, L. (2009). Using L1 in teaching vocabulary to low English proficiency level students: A case study at the National University of Laos. *English Language Teaching*, 2(3), (pp. 186-193) .